

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

新大阪からの新幹線。慌ただしく過ぎた二日間の研究会のことを思い返しなが、少しだけ涼しい気分です。車窓を流れる夏の夕景色を眺めていた。

興奮がさめきらぬ頭の中では、二日間のいろいろな光景が走馬灯のようにかけ巡っている。そんな時、ふと、私は二〇年以上も前のある事件を思い出した。そして車中そのことがずっと頭から離れなくなってしまった。

それは、受け持ちであった若い頸損（* 1）の患者さんが病院で自殺をするというショッキングな事件であった。

私にとっては、もちろん忘れることができないことではあったが、年が経つにつれ思い出すこともほとんどなくなっていた。

なぜ突然その事件を、そしてその青年のことを思い出したのだろうか。

私は、それはきっと、今日の谷口さんの講演の影響に違いないと思った。

例年八月の末開かれる全国地域リハビリテーション研究会は、今年は猛暑の中、野崎観音で有名な大阪の大東市で開かれ、二日間にわたり、リハビリテーションの総合性について医療、保健、福祉、教育、建築、行政等の立場から熱心な討論がなされた。

谷口さんの講演は二日目の一番最後のセッションだった。

「ADL(*2)の向上は自立生活におけるプライバシーの確保という点と密接に関係している。しかしながら、障害者に対して健常者への限りなき接近という価値観を強制することは、障害者の人権を顧みない現象を生む恐れがある。依存による自立、リスクを負う自由という価値観を根底にもち、健常者もどきの生活を求めるのではなく、障害者として主体的な生活を送りたい」

谷口明広さんは脳性麻痺のため歩くことができない。車椅子に体を縛り、不随運動のために体をくねらせるようにしながら、汗びしょりになって、そして、一語一語を体の芯から絞りだすように聴衆に語りかけた。ADLとQOL(*3)に関する論旨は明快であった。

谷口さんの講演は会場に少なからず緊張と興奮そして共感をもたらしたように思えた。「どうせ歩けないのに、毎日毎日、起立運動や歩行訓練に多くの時間をとられてしまうことに堪え難い思いがあった。衣服の着脱に一時間を要するとすれば、介護人の介助によって一〇分で着脱を終わらせ、残り五〇分をより人間的に有意義な時間として使う。一日の時間は限られているのだからそのように時間を使わなければ、友人と語らう時間もなくなってしまう」

谷口さんは介助を受けながらも独立して福祉関係の仕事に打ち込んでいる。

「生活における質的研究は、量的な生活水準が満たされて初めて展開されるものである。障害者の生活が果たして量的に満たされているのか、まずその検証が必要である」

その切り口は鋭い。

「日常の生活でどうして障害者だけが努力をしなければいけないのか」

この問いかけはノーマライゼーションの進まぬ現実に対する苛立ちのようにも、また、われわれ健常者に対する痛烈な批判のようにも受け取れた。

車窓の外には夕闇が追っていた。

交通事故で頸損になったその青年が入院してきたのは、二〇年以上も前のことであるから、私がまだリハビリテーションの勉強をはじめたばかりの頃である。

C 6(*4)の頸損であった。受傷してからかなり日数が経っていたが、入院当初は自分では全く何もできない状態であった。しかしとてもがまん強く明るい青年で皆に好かれていた。いつも訓練が終わると夕食の時間までスタッフと楽しそうに冗談話をしていた。

何か月かの訓練で、やっと一人で車椅子から降り、マットの上で少し移動ができるまでになった。

その日も、夕刻、外来の急患の処置を終え後片付けをしていた私たちとところにやってきて、いつものように楽しげに時間を過ごしていた。

夕食時間になって、彼は自分の部屋に帰っていった。そう私たちは思っていた。

彼がその場を離れて一〇分も経つか経たない時、窓の外で何か重い物が地面に叩きつけられたようなにぶい音と地響きがした。私たちは一瞬顔を見合わせ、音がした方に駈けていった。そこには彼の無残な姿があった。

六階の屋上には、薄暮に霞んで、彼の車椅子がぼつんとあった。その脇にスリッパがきちんと揃えて置かれていた。

屋上には金網が巡らしてあったが、その下にわずかな隙間があった。たしかに痩せた彼ならどうにか通り抜けられる。車椅子から降り、ありったけの力をふり絞ってその隙間をかい潜ったのであろう。

これは発作的にできることではない。よほど前からの計画だ、と私たちは思った。そうすると、いったい彼は何を目的に今まで辛い訓練に耐えてきたのだ。彼の訓練の具体的な目標は自力でこの狭い隙間をくぐり抜けることにあったのか。

死ぬために訓練をするといったことがあってよいのか。ADL とは人にとって何なのか。リハビリテーションとは何なのか。私たちが彼にしてやれたことは何だったのか。彼は私たちに死を以ていったい何を伝えようとしたのか。それにしてもあの間際までの笑顔は何だったのか。

私たちは混乱した。そして、言い知れぬ虚しさに襲われていた。

あれから二〇年も経っているというのに、そして、一生忘れることができない事件にも拘らず、私は、その時の自分の思いを整理することも深めることもできないまま今日にいたってしまったように思えた。

ADL が自立することは谷口さんも認めるようにプライバシーに関わる重要なことである。したがって、そのために努力をすることは大切なことに違いない。しかしそれに費やされる時間と労力の量が問題だ。なぜなら、ADL の自立それ自体は人生の目標にはなりえないからである。谷口さんが言う「障害者は障害者として生きる」という意味を私たちはもっと深く考える必要があるのであろう。

自ら命を絶った頸損の青年が私たちに何を考えて欲しかったのか、私はようやくその糸口を見出したような気がした。

いつのまにか外は夜になっていた。もうひかりは三島を通り過ぎたらしい。

(大田仁史「ADLとQOL」『大田仁史のリハビリ・エッセイ 心にふれる』所収)

*1 頸髄損傷のこと。

*2 Activity of Daily Life の略。日常生活動作。たとえば、食事動作・更衣動作、トイレ動作など、身の回りの動作を指す。

*3 Quality of Life の略。生活の質。

*4 頸髄の損傷部位。

【問題】著者は、谷口さんの講演から二〇年以上も前の事件と未整理の問題点を思い出しました。しかし、同時に、それを整理し深めていくための糸口も発見することができたようです。谷口さんの講演について、あなたがそれをどのように受け止めたかを述べつつ、著者自身が抱えてきた問題点に対して著者がこの後どのように対応していくか想像して、千二百字以内で述べなさい。